＜研究ノート＞

『マルクス・エンゲルス全集』の出版社—ディーツ

的場昭弘

はじめに—マルクス・エンゲルス全集の出版社が変わる

1998年暮，マルクス・エンゲルス全集編集委員会は新編集体制になってからの初めての巻を刊行した。この出版のニュースは，ドイツ各地の新聞で大々的に取り上げられた。マルクス・エンゲルス全集，すなわち新メガは1991年ソヴィエト崩壊によって大きくその編集体制が変わったが，新しい編集体制になって出版された巻はこの時までなかった。その意味では大きなニュースであった。

1998年12月19日『ユンゲ・ヴェルト』紙は，「メガ中断の終焉：5年たって『マルクス・エンゲルス全集』第1巻が発刊された」[1]という記事を掲載した。発刊された巻は第IV部の3，「1844年夏から1847年までのノート」であった。その記事の中で最後に，この『マルクス・エンゲルス全集』は1500部印刷され，その半分が日本で販売されると書かれてあったことは印象的である。表面でマルクス離れが進行しつつある中で，まだまだわが国は高価で専門的な『マルクス・エンゲルス全集』を購入する人々が数多くいるということである。

しかし，そこであまり問題にはされなかった点があった。それは，新メガの出版社がディーツ出版からアカデミー出版に変わった点である。マルクスの本と言えば，ほぼ100年ディーツ出版と相場が決まっていた。そのディーツ，すなわち社会民主党の出版局として一九世紀からの伝統をもつディーツ出版社がマルクスの出版から手を引いたことは，実はかなり大きな意味を持っている。ディーツというマルクスお馴染みの出版社がマルクス・エンゲルス全集の出版をやめたことは，1989年のベルリンの壁，さらにはソ連型マルクス・エンゲルス全集の過去の遺産を清算する意味で大きな事だったからである。

カウツキーはこう語っている。「古典文学はコッタの名前，新興の民主主義の文学はハイネの出版者カンペ，フォイエルバッハの出版者ヴィーガントと密接に結びついている。同様に国際マルクス主義は我が同胞の名前J.H.D.ディーツと結びついている」[2]と。

その意味でも，マルクスと密接に結びついたディーツという出版者がマルクスから離れたというのは大きな事件だったのである。それゆえ，あまり知られていないディーツ出版についてここで述べることは，それなりの意味をもつことと思われる。

(1) 生前マルクスの作品を刊行した出版者

a マルクスの作品を刊行したドイツの出版社

マルクスの原稿の出版をてがけた出版社には，主だったものでも，レーヴェンタール，レスケ，フオーグラー，マイスナー，ドゥンカーなどがある。

レーヴェンタール（1810—87）は，フランクフルトの出版者で，マルクスとエンゲルスの著作『聖家族』（1845）を出すが，その売れ行き不振のためか，その後1851年にマルクスが『経済学批判』を出そうとドイツの出版社を探していたとき，当然打診したが，断られてしまい，その後の関係は続かない。

ダルムシュタットのカール・レスケ（1821—86）は，1845年マルクスが『政治学と経済学の

批判』を執筆する契約を結び，契約金を受け取った出版社であるが，実際には完成することはなかった。その契約金はその後返却されている。レスケ出版社の名前を持つ出版社（Informationspresse－C. W. Leske）は，現在でもケルンに存在している。

オットー・ヴィーガント（1795—1870）も，エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845）を出版したり，『ハレ年誌』，『ドイツ年誌』を出しているので，マルクスとの関係ではよく出てくる名前であるが，マルクスの著作は出していない。しかし，『資本論』の印刷をオットー・マイスナーから引き受けている。

b　マルクスの新聞を発行した印刷屋

マルクスとエンゲルスは，至る所で新聞を発行した。直接編集をしなくとも，多くの新聞にも寄稿した。マルクスが編集に関係した新聞には，ケルンの『ライン新聞』，『新ライン新聞』，パリの『フォアヴェルツ』，ブリュッセルの『ブリュッセル・ドイツ人新聞』，ロンドンの『新ライン新聞』，『ダス・フォルク』がある。

『ライン新聞』（1842—43）は，ラインの財界人オッペンハイム，メヴィッセン，カンプハウゼンが創設した新聞で，3万ターレルの資本を集めた。出版元はケルンのレナルトであった。しかし，マルクス自身記事を書いただけである[3]。

『新ライン新聞』（1848—49）は，マルクス自身が資本を投資して作った新聞社であった。この新聞を印刷したオズヴァルト・ディーツ（1823 or 24—64）は，後に述べるディーツではない。

『新ライン新聞』（1850）はやがて，ロンドンで継続される。ただし，名前は『新ライン新聞—政治経済評論』と変わり，発行形態は月刊雑誌となる。編集はロンドンであったが，印刷はハンブルクで行われた。しかしこれも6号で廃刊となる。マルクスの『フランスにおける階級闘争』は，ここに掲載された。マルクスは，ハンブルクでの印刷を諦め，バーゼルのヤコブ・シャベリッツ（1827—99）に印刷を依頼するが，結局実現することはなかった。もっとも，マルクスは『ケルン共産主義者裁判の真相』（1853）をこのシャベリッツから出版する。マルクスは自著を出版してくれる出版者を探していた。同じ頃書かれた『亡命者偉人伝』（1852）は，出版者を見つけてくれると言う約束によって，結局オーストリアのスパイ，バンジャ大佐（1817—68）に渡してしまうことになる。出版どころか，これによってロンドンのドイツ人の活動をマルクスはただ警察に伝えるだけとなったのである。

パリの『フォアヴェルツ』（1844）の編集には，マルクスは途中から参加した。『フォアヴェルツ』はベルンシュタイン（1805—92）とボルンシュテット（1808—51）が発刊した新聞であるが，6月頃からマルクスは積極的に関与しはじめる。印刷はポール・レヌアールであったが，新聞の編集以上に関心を持つことはなかった。

ブリュッセルの『ブリュッセル・ドイツ人新聞』（1847—48）は，ボルンシュテットがはじめた新聞で，ブリュッセルのドイツ人労働者協会と深く関係していた。マルクスもこれに深く関与している。ブリュッセルでマルクスは『哲学の貧困』を出すが，それはここではなく，カール・フォグラーからであった。フォーグラーは，『ブリュッセル・ドイツ人新聞』の販売を行っていた。『ブリュッセル・ドイツ人新聞』の印刷は，労働者協会の議長ヴァーラウが担当し，フォーグラーも労働者協会の会員であった。マルクスは，フォーグラーから借金をした際，銀の食器を抵当に出している。もっとも，それはやがてマルクスのところに帰ってくるが。

マルクスが最後の関係した新聞は，ロンドンの『ダス・フォルク』（1859）である。編集者ビスカンプはマルクスに編集と資金提供を申し出る。1859年には，マルクスのライヴァル，ゴットフリート・キンケル（1815—82）が『ヘルマン』（1859—69）をロンドンで刊行したことによって，マルクスは，対抗する手段を探していた。しかし，この新聞は長くは続かなかった。しかも，この新聞に書いたビスカンプのフォークト（1817—95）に関する記事が，マルクスへのフォークト批判のもとになり，それに対する批判にマルクス

は一年も費やすことになる。印刷者のホーリンガーとは金銭的なトラブルも起こしている[4]。

c マルクスの作品を刊行したドイツ以外の出版者

ルーゲとマルクスがパリで編集した『独仏年誌』(1844) は，スイスの出版者フレーベル (1805—1893) の資金提供によってパリで刊行されたものである[5]。

フレーベルは『独仏年誌』がうまく行けばパリ支店を開設するつもりであった。したがって，マルクスと関係があるが，主としてフレーベルと関係を持ったのはルーゲであり，マルクスはフレーベルのところから何も出版することはなかった。それどころか，マルクスにとって最初の厳しい批判とも言えるカール・ハインツェン (1809—80) の『ドイツ共産主義者の英雄。カール・マルクス氏に捧ぐ』が1848年に出版されるが，それを出したのはこのフレーベルであった。

『フォークト氏』と『共産党宣言』は，ロンドンで印刷された。『フォークト氏』は，マルクスに対するカール・フォークト (1817—95) の厳しい批判に対する反批判の書であるが，マルクス自体大急ぎ書き終え，友人の寄付を集めて自費出版したものであった。ドイツの出版者にすべて断れ，結果としてロンドンのルドルフ・ヒルシュフェルトを選んだ。ヒルシュフェルトといえば，実は『共産党宣言』の印刷でも関係している。『共産党宣言』の初版と言われているものは，リヴァプール通りにあったブルクハルトが印刷したものであるが，同じ1848年に印刷されたものの中にヒルシュフェルト版というのがある。24ページのこの版には，フィンズベリーのクリフトン通り48番のヒルシュフェルトの住所が載っている。かつてこの版こそ初版と言われたものであった[6]。

『ブリュメールの18日』を出版したのは，ニューヨークの『レヴォルツィオーン』であった。これはアメリカに渡ったヴァイデマイヤー (1818—66) が創設した新聞であった。一八五〇年代マルクスはアメリカへの勢力の展開を計り，アドルフ・クルス (1825—1905)，ヴァイデマイヤーと連絡を取り合っていた。マルクスたちのグループ，すなわちエンゲルス，レスナー (1825—1910)，ドロンケ (1822—1891)，ヴィルヘルム・ヴォルフ (1809—64)，イマント (1823—97) はアメリカの新聞に投稿することにした。しかし，マルクスとエンゲルス以外には充分な執筆能力はなく，さらに資金不足も重ってこの新聞は姿を消す。クルスによって，『ケルン共産主義者裁判の真相』は，アメリカのボストンの『ノイ・エングランド・ツァイトゥング』に発表されている。

出版する予定で結局出版されなかったものもある。その一つは『ドイツ・イデオロギー』である。『ドイツ・イデオロギー』(1845—46) は，エンゲルスがハンブルクの「ホフマンとカンペ」に交渉して出版する予定であったが，結局失敗する。カンペは，『ライン新聞』時代に書いたケルン教会闘争に関するマルクスの論文を単行本として出版するつもりであったが，実現しなかった。それ以後も，1850年マルクスは『新ライン新聞—政治経済評論』の継続を求めて，カンペ (1792—1867) にも掛け合ったが失敗に終わり，実現していない。

出版されなかったもう一つの有名な作品に『経済学・哲学草稿』(1844) がある。『経済学・哲学草稿』はできあがりから言っても，『ドイツ・イデオロギー』より完成度が低い。この作品はレスケと結んだ『経済学批判および政治学批判』になる予定であったとされているが，レスケとの契約は1845年である。

また1845年のフランスのスパイがブリュッセルからパリに送った報告書には，マルクスが『社会的視点から見たフランス国民公会の使命』という題名の本を出す予定であると書かれている[7]。確かにマルクスは，クロイツナハからパリにかけて (1843年) 取られたノートでフランス革命の研究をしている。しかし，これも出版されることはなかった。

マルクスが若い頃に出版しようとして実現できなかったものに，詩集がある。1837年マルクスは父に詩集を出すために金を送ってくれるよう頼

むが，結局父に断れる。おまけに，シャミッソー（1781—1838）の雑誌に投稿したが，これも送り返されてくる。しかし，結局1841年ドクトルクラブの雑誌『アテネーウム』に2篇掲載される。これがマルクスが最初に出版した作品である。

d　フランツ・ドゥンカー書店

フランツ・ドゥンカーは『経済学批判』（1859年）の出版社である。ところが最近出版された「ドゥンカーとフンブロット」社の出版目録を見てもこのマルクスの作品は掲載されてない。いや同時期に出たエンゲルスの『ポーとライン』（1859）も出ていない。それでは「フランツ・ドゥンカー書店」と「ドゥンカーとフンブロット書店」はまったく関係ないのか。しかし，マルクスにフランツ・ドゥンカーを紹介したラサール（1825－1864）がそこから出した『イタリア戦争とプロイセンの課題』（1859）『エフェソスの暗黒の人ヘラクレイトスの哲学』（1858）『フランツ・フォン・ジッキンゲン』（1859）の3冊は方はちゃんと掲載されているのである。マルクスの『経済学批判』の出版が遅れたのは，ドゥンカーがラサールの本の印刷を優先させたことであった。「ドゥンカーとフンブロット」は18世紀から続く出版界の老舗であった。

マルクスは後に原稿を出したラサールの本の方が先に出版されたこともあり，フランツ・ドゥンカーとの間にいざこざを起こし，その後縁を切ったのである。そのため，『資本論』はフランツ・ドゥンカーから出ることはなかったし，マルクスの作品は二度とここから出版されることはなかったのである。もしそれが『資本論』であったならば，『目録』に掲載されたのであろうか。この目録は，ドゥンカーの宣伝目録に掲載されたものから作ってあるので，マルクスの『経済学批判』がはずされたのは新聞広告が出なかったからかもしれない。しかし，エンゲルスの本は広告が出ているので，新聞広告が出たかどうかだけでは説明がつかない。出版社の目録にもなかったということか。

ドゥンカー書店，正式には「ドゥンカーとフンブロット書店」は18世紀の末に創設され，現在も存在する老舗の出版社である[8]。1786年フリードリヒ・フィーヴェク（1761—1835）がベルリンのミリウス（Mylius）書店の後を引き継いだときに始まる。最初の成功はヴィルヘルム（1767—1845）とフリードリヒ（1772—1829）のシュレーゲル兄弟が雑誌『アテネーウム』を出版したことであった。やがて1799年にゲーテの出版社「ヘルマン・ウント・ドロテーア」を買収する。

ミリウス書店は，ブラウンシュヴァイク公に招かれて，ベルリンの店をフレーリヒに売ってブラウンシュヴァイクに移転する。フレーリヒが，『アテネーウム』を引継ぎ，その後1805年カール・フリードリヒ・ドゥンカー（1781—1869）が後を継ぐ。ドゥンカー書店という名前はここから始まる。ドゥンカーはレッシング（1729—81）が編集していた『フォシッシュ・ツァイトゥング』（ライプツィヒ）の出版元ゲオルク・フォスの所で出版業の勉強をしていた。やがてフォスの紹介でフレーリヒと知り合う。フレーリヒが急死したことによって，未亡人を助けることとなる。

1809年，ドゥンカーはペーター・フンブロットとともにフレーリヒ書店を買い，名前は「ドゥンカー・ウント・フンブロット」となる。ナポレオンの敗北とともに，ベルリンの発展が始まる。ドゥンカーはベルリンのフランス通りとフリードリヒ通りに店を構えることになる。ここは後にマルクスが通うドクトルクラブの開かれたカフェ・シュテーリのすぐ近くであった。この書店にはフィヒテ（1762—1814），ハイネ（1797—1856），ベッティーナ・フォン・アルニム（1785—1859）などが通った。ランケ（1795—1886）のドイツ史の本やヘーゲル（1770—1831）の全集もここで出版された。1828年から1831年まではドイツ書店協会の会長の仕事もドゥンカーは勤めるほどドイツを代表する大出版社となる。また1852年から1867年にかけてベルリン議会の議員でもあった。

しかし，1866年ドゥンカーの死後出版社はガイベル（1806—1884）に売却され，ライプツィヒに移る。1869年にランケの協力で出版された全

56巻の『全ドイツ人名辞典』は現在も続いている。その後の歴史は本稿と関係がないので割愛するが，要するにマルクスが『経済学批判』を出版したドゥンカーはドイツを代表する出版社であったということである。マルクスにとっては，これは願ってもないことであったろう。ちなみにマルクスは，大学教授よりも少し高い原稿料がいただけると喜んでいた。

さてマルクスの『経済学批判』を担当したのは，息子のフランツ・ドゥンカー（1822—88）であった。ドゥンカーが出している『全ドイツ人名事典』の項目にはフランツのことも書いてある。「彼の息子のアレクサンダーとフランツが作った出版社と彼の会社とのつながりが，得策ではないとわかった」[9]。得策でないのはフランツとラサールとの関係かもしれない。

マルクスは，1858年3月29日にこう書いている。「ラサールから今日手紙がきた。ドゥンカーは次のような条件で経済学の出版を引き受けるだろう。僕は，2，3ヶ月ごとに3—6ボーゲンのノートを引き渡す（この案は僕自身からしたものだ）。彼は三冊で中止する権利をもつ。要するに，われわれはそのときはじめて最終契約をもつわけだ。彼はさしあたり1ボーゲン当たり，3フリードリヒ金貨を支払う」[10]。

順調に滑りはじめた契約も，ラサールとの関係で崩れてくる。1859年に初めに原稿を送付するが，ラサールの著書の印刷のためにマルクスの原稿の印刷が遅れる。「だれが僕の邪魔をしているか，わかるかい。ほかでもない。それはラサールだ」[11]。しまいには「汚い奴」，「とんでもないのろま野郎」などと暴言を吐きはじめた。出版した後は，広告が出ないとマルクスは批判する。結局，マルクスはドゥンカーとの取引を断念する。「仕事の継続について直接にもうあの男に申し入れることは，僕には不可能のように思われた」[12]。こうしてドゥンカーからは『経済学批判』の第一分冊が出たのみで終わるのである。

フランツ・ドゥンカーは1860年前後政治的運動に巻き込まれていた。1860年代の自由派の運動の中心にいたのである。ドゥンカーはドイツ進歩党のシュルツ・デーリッチュの仲間であった。その論陣をはったのが，ドゥンカーの左派自由派の新聞『ベルリナー・フォルクスツァイトゥング』（1853—1944）であり，『ベルリナー・フォルクスツァイトゥング』は最大22000部の売り上げを誇った。ドゥンカーはまた，反プロイセン的な『ナツィオナール・ツァイトゥング』（1848—1878），『南ドイツ新聞』（1859—64）にも参加していた[13]。こうしたドゥンカーの背景から言っても，ラサールやマルクスと接近するのは当然であったかもしれない。

e 『資本論』の出版社ーマイスナー

マイスナーは『資本論』の出版社としてあまりにも有名である。またマルクスとの『資本論』の出版契約が，マイスナー以外での出版を不可能にする契約であったため，このマルクスの主著はマイスナーから出版され続けることになる。その意味では，マルクスの最初の出版社といえなくもない。しかし，マイスナーがマルクス主義者であったり，マルクスの思想に好意的であったわけではない。

オットー・マイスナー（1819—1902）[14]は，1848年に出版を始めたハンブルクの無名の出版社であった。1865年マルクスと『資本論』の契約を交わしたのは，マイスナーにとって危険な賭けであったとも言える。膨大な量の『資本論』を出版することによって経営危機を迎えるはずであったが，幸いなことに増刷されることになった。

マイスナーは1819年クヴェードリンブルグの郵便局員の家に生まれた。1833年マグデブルクの書籍取り扱い業者ハインリヒスホーフェンに徒弟として入った。やがて，マイスナーは，ハンブルクの「ホフマンとカンペ」に移る。この「ホフマンとカンペ」とは，先に述べたあの「ホフマンとカンペ」のことである。1848年6月カンペから独立し，シルゲスとともにハンブルクに「マイスナーとシルゲス」を開く。この書店は出版と販売の両方を行うことになる。

マイスナーが手がけた著者は，フォイエルバッハ（1804—72），カール・グリュン（1817—87），

ラサール，カール・フォークトなどであった。1855年にシルゲスと分かれた後，「オットー・マイスナー」という名前になる。1865年にはマイスナーの書店部の方は，ベーレとの共同企業になり，「オットー・マイスナーとベーレ」となるが，出版部はそのままであった。出版の主力は法律，政治関係，そしてハンブルクの歴史関係の書物であった。

マルクスは『資本論』の契約を1865年に3月21日ハンブルクのオットー・マイスナーと交わす。契約は八項目に分かれ，『資本論』が全二巻で出版されること，出版契約は双方が断らない限り有効であること，著者に一〇冊送られること，原稿は遅くとも五月末までに出版社に送られ一〇月に出版されることなどが書いてあった。

しかし，全二巻という契約内容は，分量が増えたために変更されることになる。したがって原稿の提出も大幅に遅れ，二年後の1867年9月に出版されることになってしまった。とくにマルクスは原稿の提出期限については，その後契約条件からはずしてしまってもいる（第二の契約書は現存しない）。

さて肝心のマルクスの原稿料の方はどうであったのか。契約書には書いてないが，数百ターレル（50万円から100万円ぐらいか）だったと思われる。彼は後に手紙で「『資本論』の原稿料は執筆中に吸ったタバコ代以上にもなっていない」と書いているが，ひょっとするとヘビースモーカーだったマルクスにとってタバコ代にもなっていないかもしれない。

こうして1867年4月マルクスは，とうとう書き上げた『資本論』第一巻の最後の原稿を届けにハンブルクに向かう。原稿はマイスナーからライプツィヒのオットー・ヴィーガントに送られ，そこで印刷された。

その年の九月の書店に対する広告にはこう出ている。「マルクス『資本論ー政治経済学批判第一巻，第一冊。資本の生産過程』大八つ折版。仮綴じ本。3ターレル三分一」。『資本論』第一巻初版の価格は，今のお金で計算すると大体3万円から4万円というところか。相当高価な本だった。

『資本論』の出版部数は千部。五分の一は予約注文によってすでに発売前に売り切れていた。しかしすぐに売れたわけではない。まず書評の少なさが禍した。10月になってマルクスは，エンゲルスなどの友人に頼んで『資本論』の書評を書いてもらうことにした。いわば「やらせ」である。とりわけエンゲルスは，同時にいくつもの書評を書き，掲載してくれるようにいろんな策を弄した。しかし，彼の書評が掲載されたのは急進派の新聞か，地方新聞であり，有力紙にはほとんど取り上げられなかった。そのため，1869年末になっても300部が売れ残っていた。『資本論』第一巻は，初めはかくも売れない本だったのである。

しかし，状況は少しずつ変化する。1871年末には「初版はすべて売りつくしたので，第二版をつくりたい」という申し出がマイスナーからマルクスのもとに届く。マルクスは，初版が高額であったことを考慮して，10分冊で刊行することも考えた。1871年と言えばパリ・コミューンの時代で，次第に世の中は社会主義に関心を持ち始めていた。第二版は強気の3000部であった。

『資本論』の売り上げは，ドイツ語版以外の翻訳によって加速した。最初の外国語訳はロシアで出版された。バクーニンによって始められた翻訳は，ロパーチンに受け継がれ，さらに彼の逮捕後ダニエリソンとリュバービンによって完成した。1872年3月末ロシア語訳は最初から3000部で出版された。ロシアではまたたくまに売れ，さら大きな学問的論議も引き起こした。

フランス語訳はロワが引き受けラシャトル社から出ることになったが，訳に不満だったマルクスは大幅に手を入れた。結局一部は完全なオリジナル版となってしまった。1872年9月から出版され始めたフランス語訳は，1875年11月までに四つ折り大判の8頁，44分冊で刊行された。最初の分冊は一万部，それ以後の分冊も数千部発行された。

このように次第に発行部数を伸ばしていった『資本論』であるが，それには不思議にもこの本が当局の検閲に触れなかったことが幸いしてい

た。1878年のプロイセン警察の報告には，学問的な本であり「社会主義鎮圧法に該当しない」と書かれている。同じことはプロイセン以上に厳しいロシアについても言えた。

マルクスが住んでいたイギリスでは，英訳が遅れに遅れ，20年後の1887年（マルクスはすでに1883年に死んでいた）にわずか五百部で出版された。マルクスの名はイギリスでそれなりに知られてはいたのだが，英訳を見られなかったのは残念でならなかっただろう。生前マルクスは，ダーウィンとスペンサーに『資本論』第二版を贈呈したが，つれない返事しかもらえていない。もっともこの二人のイギリス人には，ドイツ語が読めなかったのであるが[15]。

(2) ディーツ出版

a ハインリヒ・ディーツ

i. 社会民主党出版部ディーツの成立

ハインリヒ・ディーツ（1843—1922）[16]出版は，マルクスの作品を手がけたそれまでの出版社とまったく違っていた。なぜなら，ディーツ出版は，社会民主党のパンフレットを出版する出版社であったからである。しかも，その経営は事実上社会民主党が握っており，所有権は形式上ディーツ個人が握っていたが，実際には社会民主党が管理していた出版社であったからである。

しかし，ディーツもすぐにマルクスの『資本論』を出版することはできなかった。それは，その著作権が長い間オットー・マイスナーに握られていたからである（死後30年）。ディーツが最初に取り組んだマルクスの作品は，『哲学の貧困』（フランス語）のドイツ語訳である。1883年に出版された。この翻訳はベルンシュタインとカウツキーによるもので，ドイツ語での初訳であった。その後ディーツは少しずつマルクスの書物を出版していき，やがてマルクスの著作集を一手に引き受けるようになる。

ヨハン・ハインリヒ・ヴィルヘルム・ディーツは，1843年10月3日，リュベックの仕立職人の親方ヨハン・ヨヒム・クリスティアン・ディーツとアンナ・カタリーナ・エリザベートとの間の3男として生まれた。父は親方であり，生活は貧しくはなかった。

1839年私立の学校にあがり，14才の時から徒弟修業が始まった。父が1855年に亡くなっていた。ハインリヒが始めたのは仕立職人としての修業ではなく，植字職人の修業であった。1862年修業を終えたハインリヒは当時の慣習にしたがって，遍歴修業の旅に出た（すでに当時は義務ではなかったが）。

彼が向かったのはロシアであった。ザンクトペテルスブルグに着いたハインリヒ・ディーツは，そこで印刷職人として仕事を始めた。当時ドイツ人の植字工は400人もいた。ロシアでディーツは社会主義者のチェルヌイシェフスキー（1828—89）を個人的にも知るようになる。1866年，弾圧が激しくなってきた時，ディーツはリュベックに戻った。

リュベックに帰ったディーツはそこで結婚し，やがてドイツ労働者総同盟（ADV）に入会し，ラサールを知るようになる。1871年には社会民主党に入党している。ディーツと社会民主党との関係は党の新聞の印刷から始まった。彼が勤めたのはフィリプセンの印刷所であった。ハンブルクで作られた社会民主党新聞は，『ハンブルク＝アルトナー・フォルクスブラト』（1875—78）であった。党は独自の印刷所を持っていなかったため，印刷をマルティン・フィリプセンが請け負うことになる。やがて1876年フィリプセンが印刷所を売ることになり，ディーツが引き継ぐことになるのである。もっともディーツがその代表である「印刷工組合」がその所有者であった。

『ハンブルク＝アルトナー・フォルクスブラト』の販売数は1万5000前後であっ。ディーツが経営権を得るのは，まったく偶然の事件によってである。1878年ビスマルクが社会民主党の活動を制限する取り締まり法を作成したことにある。社会主義取締法によって党が独自の印刷所を法律上持つことができなくなったのである。「印刷工組合」は15万マルクでディーツに販売する

という形をつくることになった。こうして，出版者「J.H.W.ディーツ」が誕生した。しかし，実際にディーツが買ったのではない。社会民主党の所有が禁止されていたため，個人の名前を使ったのである。とりわけ人望の厚かったハインリヒ・ディーツが選ばれただけなのである。

ディーツは，1912年その当時の頃を振り返ってこう述べている。「1876年私は，社会民主党が作った「印刷工組合」の経営を引き受けた。1879年10月19日私はこの会社を購入し，独立会計で運営した。——1878年10月31日，私の出版社には『ハンブルク＝アルトナー・フォルクスブラト』が18000部あり，それが警察によって発禁されていた。こうして16人の印刷工と植字工，ほぼ35人の配達人や編集者，発想者などが当面食べるものもない状態であった」[17]。

ii　社会主義者鎮圧法（Sozialistengesetz）のもとでのディーツ

こうして生まれたディーツ出版は，最初から困難な課題に遭遇した。まず政治的な出版物が出せないことであった。『社会主義鎮圧法』とは，正式には「保安を乱す恐れのある社会民主主義の運動を取り締まる法律」であった。社会民主党と労働組合の活動を全面的に禁じたもので，新聞の発行，集会が禁止となった。時限立法であったため「例外法」（Ausnahmegesetz）とも言われている。

そのためディーツは収入源の機関紙が発行できず，新しい出版物を探さねばならない。そこで現れたのが『裁判所新聞』（*Gerichtszeitung*）（1878—81）の発刊であった。たちまち12000の購読者を獲得した。しかし，事実上この新聞はカモフラージュで，裁判所の記事が載っているのではなく，政治的新聞であった。いわば『ハンブルク＝アルトナー・フォルクスブラト』の後継紙であった。

しかし，ディーツ出版の企画でもっとも当たったのは『ヴァーレ・ヤーコブ』（*Wahre Jakob*）である。これは，1795年11月5日から刊行された月刊誌であった。内容は娯楽的要素も入ったために良く売れ（発行部数が20万部を越えたことがある）。ディーツ出版の稼ぎ頭になる。

1881年3月23日，『裁判所新聞』はロシア皇帝の暗殺についての記事が出たのをきっかけに発行停止となった。その後『ビュルガー・ツァイトゥング』（1881—87），『エコー』（1887—1964）へと継続していった。

こうしてディーツ出版の，南のシュトゥットガルトへの移転が決まる。1881年12月31日シュトゥットガルトにディーツ出版が創設される。ディーツ自身は，1881年社会民主党の国会議員となる。ところがディーツは，書店の家宅捜索をきっかけに，議員でありながら逮捕された初めての議員となった。

1882年，カウツキー（1854—1938）とベルンシュタイン（1850—1932）は新しい党の雑誌を企画した。こうして1883年1月1日『ノイエ・ツァイト』（1883—1923）がディーツ出版から刊行された。月刊で，価格50ペニヒ，発行部数5000であった。編集者はカウツキー，ブラウン（1854—1927），ディーツであった。しかし，この雑誌は売れ行き不振で，赤字を計上する。しかし，重要なことはこの雑誌が，マルクス主義の雑誌だったということである。

カウツキーはこう言っている。「1882年の夏，つまりもっとも危機の時，私はあえてディーツに科学的社会主義の月刊雑誌の基礎を作ってくれるよう頼んだ。私は，当時一般的に普及していた折衷的社会主義，ラサール，ローベルトゥス，ランゲ，デューリング的要素とマルクス主義との混交に対して，1880年1月来共同作業してきたベルシュタインと組んで，一貫したマルクス主義を貫こうとしていた」[18]。

1883年からディーツ出版はマルクスの著作の出版に着手する。『哲学の貧困』の1500部の印刷を皮切りに，マルクス主義関係の文献が続々と出版されていく。シュタインベルク（1935—　）によるとこの時代こそ，社会民主党にとってマルクス主義の受容期であった[19]。

1885年ヘルマン・シュリューターを中心にチューリヒで「社会民主党文庫」の企画が始まる。ディーツ出版はそれに似た企画でレクラム文庫のような廉価本のシリーズを刊行することに決

定する。その名は「国際文庫」であった。

この全部で67巻（1885—1923）出版された「国際文庫」には，マルクスの『経済学批判』（第30巻），『哲学の貧困』（第12巻），『剰余価値論』（第35巻，第36巻，第37巻，37巻a），エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』（第14巻），『反デューリング論』（第21巻），『家族，私的所有，国家の起源』（第14巻），カウツキーの『キリスト教の起源』（第45巻），『プロレタリア革命とその綱領』（第64巻），ベーベルの『シャルル・フーリエ』（第6巻），ベルンシュタインの『英国革命における社会主義と民主主義』（第44巻），『社会主義の諸前提と社会民主主義の課題』（第61巻），メーリングの『レッシング伝説』（第17巻）などが入った。とりわけ売れたのが，ベーベルの『女性と社会主義』であった。これは当時18万部も出た。

一方社会民主党の活動が違法な中で，1883年デンマークのコペンハーゲンで開催された党会議の出席者に対して，1886年ドイツ政府は調査をして告訴した。この結果，ディーツはケムニッツの刑務所に11月収監された。釈放されたのは1887年の5月であった。

社会民主党内に最初に入ってきたマルクス主義は，エンゲルスの『反デューリング』を通じたダーウィン主義的なものであった。だから，『国際文庫』第1巻としてディーツ出版が1887年出版した，エイヴリング（1851—1898）の『ダーウィンの理論』はよく売れた。

1887年には社会主義者鎮圧法がより厳しくなり，チューリヒの社会民主党幹部シュリューター（1851—1919），ベルンシュタイン，モテラー（1838—1907）はロンドンへ亡命する。やがて社会主義者鎮圧法は1890年をもって終わり，新しい時代が始まった。

iii　社会主義者鎮圧法の後

1890年社会主義者鎮圧法の廃止にともなって，ハンブルクのディーツ出版の所有者は，ハインリヒ・ディーツから社会民主党に戻った。しかしその名前はその後も変わることなく続く。1895年8月エンゲルスが亡くなると，エンゲルスのもとにあったマルクスとエンゲルスの草稿，書簡，書籍がロンドンのモテラーのところに保管されることになった。やがてベルリンに移されるが，最初はディーツ出版のあるシュトゥットガルトがその候補地にあがっていた。

社会民主党内で1890年代修正主義論争が盛んに行われるようになった時，マルクスの思想の根本は何であるかということが議論になりはじめた。そこで，ディーツ出版にマルクスとエンゲルスの遺稿を整理して出版するよう党内から圧力がかかってきた。そこで，党内ではメーリング（1846—1919），ベーベル（1840—1913），ベルンシュタインが，マルクスとエンゲルスの書簡集の編集，社会民主党史の執筆を依頼される。

1897年から98年にかけてメーリング『社会民主党史』，1902年メーリング編『マルクス，エンゲルスとラサールの文献的遺産』，ベーベルとベルンシュタイン編『マルクス・エンゲルス往復書簡集』（1913），リャザノフ編『1852年から1865年までのマルクス・エンゲルス著作集』（1917）が出版された。これらは，「国際文庫」の次ぎに刊行された「小文庫」の中に含まれていた。

一風変わったところでは，ディーツ出版が，レーニン（1870—1924）の『何をなすべきか』をロシア語で出版していたことであろう。出版したのはロシア語版であった。定価1ルーブルで当然ロシアに送られて売られるためのものであった。

1913年とうとうマルクスの『資本論』の出版権が失効する日がやってきた。1914年にディーツ出版は『資本論』の出版を決意する。これでマルクスのものは全てディーツから出ることになった。

1913年はマルクス死後30年で，マルクス・エンゲルス全集の企画も持ち上がっていた。アドラー（1873—1937），バウアー（1881—1938），ヒルファーディンク（1877—1941），リャザノフ（1870—1938）等によるこの企画は結局成功しなかった。

第一次大戦後もディーツ出版の出版活動は旺盛であった。紙価高騰，紙不足の中で，社会民主党

の機関出版局として，赤字であるにもかかわらず出版は衰えなかった。戦後のインフレーションは，ディーツ出版の場合も同じであった。1922年『ノイエ・ツァイト』は15マルクであったのが，1923年には5800マルクと上昇していった。結局シュトゥットガルトのディーツ出版は売却されることになる。すべてはベルリンに移った。そして『ノイエ・ツァイト』が1923年に廃刊，『ヴァーレ・ヤーコブ』も1923年に廃刊した。その少し前ハインリヒ・ディーツは1922年8月28日にこの世を去っていた。

b　ディーツ出版のその後

ディーツの死後，ディーツ出版はどうなったか。ナチス政権の成立とともに，1933年5月10日社会民主党の財産はすべて没収されてしまった。6月22日には，社会民主党は「人民と国家に反逆する党」として全面禁止された。すべての関連企業はまとめられ，1935年に全財産が凍結された。ディーツ出版は1934年8月24日に企業としての登録が抹消されていた。

戦後，ディーツ出版は復活する。しかし，その復活は二つに分断されたドイツをそのまま象徴していた。二つのディーツが出現するからである。

東ベルリンでは社会民主党，共産党が統一労働者党を作って，いち早くディーツを復活させた。共産党系の出版者「ノイアー・ヴェーグ」と「フォアヴェルツ出版」が「ディーツ出版」に統合されることになる。19世紀の時と同様にこのディーツ出版の仕事も『哲学の貧困』を1947年に出版することによって始まった。そして『マルクス・エンゲルス著作集』や『マルクス・エンゲルス全集』などを出版する東ドイツを代表する出版社となるのである。ところがディーツ家のものがまったくいないのにディーツ出版という名前を名乗るのはおかしいというクレームがつく。

1946年シュトゥットガルトのアニ・ガイガー婦人（ハインリヒ・ディーツの孫）が，東ベルリンに手紙を書いてきて，ハインリヒの娘，すなわち彼女の叔母のドリス・ドレヒャーの所有している旧ディーツ出版という名称を，ベルリンの新しい会社の名前に譲る申し出をしてきた。こうして東ドイツにディーツという名前が行きかけた。しかし，今度は1947年5月ハノーファーの社会民主党から「党出版局ディーツ」という名前を使うことが申し渡される。これにはディーツの息子のフリッツ・ディーツが絡んでいた。

1947年のベルリンの法廷では，歴史的な名前は誰でも使ってもいいということが承認されていた。こうして，東ドイツで統一労働者党，西ドイツで社会民主党が，党出版部として同じ名前を使うという異常事態が起きる。ディーツ出版という名前がいかにマルクス主義にとって重要な意味を持っていたのかがわかる。

他方西ドイツでは，1946年社会民主党によって1933年に解散された旧党出版部を再興することが決定する。ディーツ家の遺族と連絡をとり，西ドイツのディーツ出版を正統とする手続きをとり始める。しかし西ドイツではディーツ出版へのこだわりはさほどなく，党出版部として「ノイエ・フォアヴェルツ出版」が創設された。やがて「ブント出版」と名前を変え，ケルンに移る。

もちろんディーツ出版が消えたわけではなかった。その後何度も裁判で名称をめぐる権利が争われていた。1973年にボンの出版者がこの西ドイツのディーツ出版を買収し，本格的に活動し始めた。

二つの出版者は対立したままで，やがて東ドイツの崩壊を迎える。1991年2月1日，西のディーツ出版は東のディーツ出版の営業の停止を申し出る。

その裁判は7年後に決着する。1998年ケルンの裁判所は結論を出す。東のディーツ出版は，すぐに企業名を「カール・ディーツ」出版に変えねばならないということになった。カール・ディーツという名前は，ディーツ出版の名前をなかばでっちあげるため，戦後ルドルフシュタットにいたある人物の名前から取られていた。だから，その名前を明確に書かねばならないということは，本来のハインリヒ・ディーツではないということを認めることである。短縮名として，「ディーツ・ベルリン」，「カール・ディーツ」だけが認め

られる。

一方西のディーツ出版は，本社をベルリンに移しても，企業名にベルリンを付けることはできないが，ディーツの蛇のマークも使えるし，「ディーツ出版」という短縮名も使えることになった。

こうして1999年，すなわち新メガの出版に際し，ディーツ出版という名前が使えなくなってしまったのである。使えるとしてもカール・ディーツ，ディーツ・ベルリンと明記せねばならず，有名な蛇のマークも仕えなくなってしまった。新メガの発行をディーツが止めたのはもちろんこれだけの理由ではあるまい。

新メガはアカデミー出版局が出版することになったが，このアカデミー出版局は旧東ドイツのブランデンブルク科学アカデミーの出版局である。かつてはきわめてイデオロギッシュなものを出版していた部署であった。新メガの編集部は，実はこのブランデンブルク科学アカデミーの中にある。その意味でも自然の形なのかもしれない。

おわりに

ディーツという名前は，かつてのマルクスボーイならば誰でも，畏敬をもって見たなつかしい名前である。マルクスのドイツ語版を最初に手にするものが，かならず眼に触れるのがディーツ出版の蛇のマークであった。そしてもっと古い戦前のマルクスの廉価版を探すと，そこにもディーツという名前と，蛇のマークがあった。ディーツの名前を見つけることで，自然とマルクス研究の歴史の重みを知るようにできていた。

それがドイツ統一によって，もはやなくなってしまったことは寂しい。いやそれ以上に，ボンのディーツがマルクス関係の書物を出すとは思われないことを考えるとき，今更ながらマルクス研究の衰退という現実を思い知らされる気がする。

ただし，東ドイツのディーツ出版の名前は，マルクス研究にとって畏敬となつかしさを持っていただけではない。ソ連型マルクス主義，礼賛型マルクス主義，恐怖政治といった負のイメージも多分に含んでいたからである。マルクス・エンゲルス全集の冒頭にあったソヴィエト共産党のつまらない序文，注の中にあるマルクス批判者に対する暴言のかずかず，スターリン主義の残像などいくつも不吉なものが，ディーツの名前にはこびり付いているのである。

マルクスの名前がそうした不吉さから脱出するためにはかえっていいことなのかもしれない。21世紀に向かってマルクスの意味が新たに問われるとすれば，そうしたものを一度すべて一掃する必要があるのかもしれない[20]。

注

(1) *Junge Welt*. 19. Dez., 1998.

(2) Kautsky, K., Heinrich Dietz. *Die Neue Zeit*. Bd. 1. Nr. 32. 1913. S. 3.

(3) 新聞などについては，的場昭弘，内田弘，石塚正英，柴田隆行編『新マルクス学事典』弘文堂，2000年の諸項目を参照されたい。

(4) ホーリンガーの話を初めとして，マルクスについての細々とした話を，私は最近「マルクスこぼれ話」として『情況』に2000年10月号から連載しているので，それを参照されたい。

(5) Keller, H., *Die politischen Verlagsanstalten und Druckerei in der Schweiz 1840–1848*, Bern und Leipzig, 1935. S. 55

(6) マルクスの『共産党宣言』の初版の問題については，Kuczynski, Th., Das Kommunisitische Manifest, *Schriften aus dem Karl–Marx–Haus*, Nr. 49. 1995が詳しい。

(7) 的場昭弘『フランスの中のドイツ人』御茶の水書房，1995年，100頁。

(8) ドゥンカー書店については最近出版された。Simon, N., hrsg., *Dunker&Humblot. Verlagsbibliographie 1798–1945*, Berlin, 1998が詳しい。本稿はそれを全面的に参照した。

(9) Duncker, K. F., *Allgemeine Deutsche Biographie*, Vol. 5. Leipzig. 1877. S. 472.

(10) 「1858年3月29日マルクスからエンゲルスへの手紙」『マルクス・エンゲルス全集』29巻，大月書店，244頁。

(11) 「1859年5月24日マルクスからエンゲルスへの手紙」前掲書，343頁。

(12) 「1859年10月2日マルクスからラサールへの手紙」前掲書，482頁。

(13) Koszyk, K., *Deutsche Presse im 19. Jahrhundert*, Berlin, 1966. S. 143.

(14) オットー・マイスナーについては次の文献を参照した。*Hamburger Nachrichten*, 14. April. 1898. Justus Pape, Otto Carl Meissner. Börsenblatt für den *Deutschen Buchhandel*, 14. August. 1902. *Zum 50 jahrigen Jubeltage der Sortiments*

und Verlags-Buchhandlung von Otto Meissner in Hamburg, 16 Juni, 1898.

(15) 的場昭弘「20世紀最後の読書計画 『資本論』」『小説トリッパー』朝日新聞社，1999年冬季号を参照。

(16) ディーツについては，最近 Graf, A., *J. H. W. Dietz 1843-1922, Verleger der Sozialdemokratie,* Bonn, 1998. とう浩瀚な書物が出た。本稿はほぼこれをもとにしている。これ以外には *Ein Leben für das politische Buch, ein Almanach zum 120 Geburtstag von J. H. W.* Dietz, hrsg. Schmitt-Kaester,Hannover, Dietz, 1963. Kampffmeyer, P., *Heinrich Dietz, Ein kultureller Bahnbrecher,* Berlin, 1922 などがある。

(17) *Ein Leben für das politische Buch, ein Almanach zum 120 Geburtstag von J. H. W. Dietz,* hrsg. Schmitt-Kaester,Hannover, Dietz, 1963. S. 29.

(18) Kautsky, K., Heinrich Dietz, *Die Neue Zeit,* Bd. 1, Nr. 32, 1913. S. 5.

(19) シュタインベルク，H.-J.『社会主義とドイツ社会民主党』御茶の水書房，1983年，31頁。

(20) 本稿は，『神奈川大学評論』に連載している「マルクス研究家への墓標」（現在まで7回）の関連原稿として書かれているので，社会民主党についてはその連載を見ていただきたい。

（本稿は経済貿易研究所の海外出張旅費（1999年度）による研究成果である）